

《書評》

金 賢貞 『「創られた伝統」と生きる—地方社会のアイデンティティー—』

青弓社、2013 年、277 頁

中野 紀和*

Book Review: KIM Hyeonjeong: Living with Invented Tradition: Local Identity of Contemporary Japanese Society, Tokyo: Seikyusha, 2013

NAKANO Kiwa

1. はじめに

本書は、茨城県石岡市の常陸國總社宮大祭（石岡のおまつり）を長期にわたって調査研究してきた金賢貞氏の、丹念なフィールドワークの成果である。地域の社会変動を丁寧に考察したうえで都市祭礼を分析し、都市祭礼から都市社会を論じようとする都市人類学の視角を踏襲した良質なモノグラフである。評者自身も、地方都市の都市祭礼のフィールドワークを長期にわたって行ってきたことから、そのときの経験や考察と照らし合わせつつ読ませていただいた。

2. 本書の内容

博士論文に加筆修正した本書は、本論の 5 章に序章と終章を加えた全 7 章からなる。目次構成は著者の問題意識や視座を表していると考えられるため、少し長くなるが紹介したい。

序章 地方文化から地方社会を考える

- 1 フィールドとの出会い
- 2 伝統という信念
- 3 都市祭礼という視座
- 4 ローカル・アイデンティティー

*大東文化大学経営学部教授

5 本書の構成

第1章 地方社会と近代化

- 1 茨城県石岡市
- 2 国府のまち「府中石岡」
- 3 近代とまちの変貌
- 4 歴史のまちへ
- 5 「歴史」を客体化する

第2章 昭和の郷土運動と郷土像の形成

- 1 「歴史の里」石岡
- 2 石岡史蹟保存会
- 3 石岡史蹟保存会と顕彰・保存運動
- 4 郷土と郷土史家たち
- 5 受け継がれる郷土像

第3章 無形民俗文化財と新たな民俗芸能の創出

- 1 文化財指定制度と民俗芸能研究
- 2 無形民俗文化財・石岡ばやし
- 3 石岡ばやしの誕生
- 4 文化財は人を格付けする
- 5 文化財パフォーマンスとしての民俗芸能
- 6 石岡ばやしが意味すること

第4章 地域史としての都市祭礼

- 1 都市祭礼の宗教性を支える
- 2 近代以前の常陸國總社宮大祭
- 3 近代と常陸國總社宮大祭 ——氏子のまつり
- 4 石岡のおまつりの誕生 ——市民のまつり
- 5 問われる「あり方」
- 6 都市祭礼の弁証法

第5章 都市祭礼のレーゾンデートル

- 1 常陸國總社宮大祭＝石岡のおまつりの参加構造
- 2 常陸國總社宮大祭の年番町になる ——青木町を通して
- 3 石岡のおまつりの非年番町になる ——小川道町を通して
- 4 都市祭礼の担い手たち

終章 現代日本社会のローカル・アイデンティティー

- 1 「伝統化」のロジック
- 2 外部世界とのコミュニケーションツールとしての都市祭礼

3 周縁化する地方社会を語る

各章の内容を紹介しておこう。「序章 地方文化から地方社会を考える」では、留学生としての金氏の立ち位置と彼女自身の祭礼を捉える視点の変化が明確に示される。「都市社会を論じる手がかりとしてまつりという文化現象に注目する都市祭礼研究 (p.15)」とあり、本書において金氏は都市社会を論じるのだという視点が打ち出されている。1960 年代以降の宗教学や文化人類学における長期調査に基づく都市祭礼研究の動向を受け、参加者の構造やローカル・アイデンティティを分析していく道筋が示されている。その際に都市祭礼の運営プロセスを経費の面から詳細に把握し、再分配論からそれらの分析がなされていく点が本書の特色である。実は、本書において地方社会という用語は何度も出てくるが、都市社会という用語はこれ以降、ほとんど出てこない。だが、終章で現代文化の表れとして都市祭礼論を展開しており、先述の「都市社会を論じる手がかりとしての都市祭礼研究」という記述に沿うならば、都市社会論へと昇華しようとしているのだと評者は受け取った。

「第 1 章 地方社会と近代化」では、文字資料を中心に石岡の社会変動の展開を追っている。石岡の地域性格を近世期から解きほぐしたうえで、社会変動を社会経済的に丁寧かつ詳細に追うことで、2 章以降のデータの背景がよくわかり説得力をもつ。「第 2 章 昭和の郷土運動と郷土像の形成」も文字資料を中心に、石岡史蹟保存会という郷土史家たちの活動が分析の対象となる。ナショナルとローカルの狭間でゆれる、地域像の構築プロセスが把握される。「第 3 章 無形民俗文化財と新たな民俗芸能の創出」から、「第 4 章 地域史としての都市祭礼」「第 5 章 都市祭礼のレーゾンデートル」にかけて、本書の核ともいえる地域住民の実践を示すフィールドデータが活用される。第 3 章は總社宮大祭を構成する石岡ばやしを取り上げ、いかに石岡を象徴する民俗芸能になったのか明らかにしている。民俗芸能を社会的な文脈で生み出される「新しい文化現象」とする橋本裕之の視点をさらに発展させ、その担い手（コア・アクターの実践）の分析に重点を置いている点は、従来の都市祭礼研究に民俗芸能研究を活かした成果だといえよう。第 4 章、第 5 章では都市祭礼として總社宮大祭が取り上げられ、總社宮と氏子組織、とくに石岡の住民たちの總社宮とのかかわり方、経費や人の集め方などの運営面に着目し、青木町と小川道町という 2 つの町内の具体的な事例が示される。後述するが、著者が意図していたかどうかは定かではないが、子どもや若者を含めて住民たちの動向を捉えたデータの提示は、さまざまな論点へと展開できる可能性を秘め、非常に興味深い。

「終章 現代日本のローカル・アイデンティティ」は、前章までを受けての理論的考察である。都市祭礼を「複雑で流動的かつ動態的な現代文化の表れとして、つまり文化的パフォーマンスとして捉える (p.256)」点に特徴がある。民俗芸能を演じるだけでなく、その準備から反省までの自らの一連の動きを、他者との接触によって相対化していく実践とみることで、分析の射程に入れることが可能になること、その意味で都市祭礼はコミュニケーションツールであるという指摘は重要である。ここで金氏のいう都市祭礼は、他者性が欠かせないポイントとなる。さら

に、地域社会におけるローカル・アイデンティティーは一個人だけで決まるものではなく、「常に他者や外部世界を必要とする関係性の概念（p.259）」であること、だからこそ集団性の強い都市祭礼の事例が有効であるという指摘も、他者性がポイントとなる。本書では祭礼ではなく都市祭礼という表現が多用されている。なぜ都市祭礼なのか、と考えたときに、金氏の問題意識を貫いているのは、都市（社会）が有する他者性なのだと評者は理解した。

3. 意義と課題

内容紹介のなかで、本書では他者性が重要なポイントであろうと述べたが、それに伴い、以下の3点を提起したい。都市祭礼研究の位置づけ、調査者の位置づけ、事例の多様な読みについてである。

都市祭礼研究の位置づけ

金氏は、『都市祭礼』という概念の下で、比較的是っきりとした研究目的や対象を共有する調査研究の蓄積がある（p.15）」と述べており、それ自体は間違いはない。祭礼をフィールドして地域社会の変化や「伝統」を論じようとする論文はこれまでも多く見受けられるが、本書のようなモノグラフとしてまとめられた成果は近年では意外に少ない。祭礼はフィールドとして取り組みやすく、大学院生をはじめ多くの研究者がフィールドワークを行った経験があるだろう。一方で、都市祭礼研究が大きく発展したかといえば、いまだ発展途上であると言わざるを得ない。

著者は日本で民俗学を学んでいるが、本書は民俗学だけにとどまるのではない。本書の前半は、当該地域の社会変動をきっちりと分析し、社会学のパースペクティブが有効に使われている。後半の分析においては、文化人類学や民俗学の成果が取り込まれている。

なかでも評者が注目したいのは、文化人類学における都市祭礼研究のあり方との関連である。先行研究をはじめ、本書全体に地域社会のありようを明らかにしたいという問題意識が明確に打ち出されており、そこに地域社会からみた都市社会のありようを考える道筋が見える。

文化人類学で日本の都市祭礼研究を牽引してきたのは、本書でも論及されている中村孚美と米山俊直である。中村は都市祭礼の担い手の役割に注目し、都市祭礼という複合的集団行動のシステムを明らかにした。米山は都市研究の切り口として都市祭礼研究を行い、変化や創造性に着目した。2人に共通するのは、「都市」をいかに捉えるか、という問題意識であった。どちらの視点も今では都市祭礼研究においては定番といえる。

しかし、都市祭礼を切り口として都市社会を捉えようという問題意識を継承した研究はそれほど多くはない。むしろ、祭礼は宗教性、歴史性、経済性、政治性など、多様な側面が複合的にからみあうがゆえに、その時々、の理論的枠組で分析されやすい。このような状況のなかで、「地方文化から地方社会を考える」や「地域史としての都市祭礼」といった目次に示された金氏のその姿勢は、中村や米山の有していた大きな問題意識を継承しているように思える。もちろん、彼ら

が活躍した 1970 年代以降、「伝統」の捉え方や文化がはらむ権力性や政治性の問題が指摘され、本書でもその視座は文化財や郷土史家の動きのなかで論及されている。その意味において、都市祭礼研究の基盤となった視点や近年の学問動向を目配りよく取り込んだ好書である。

調査者の位置づけ

米山も中村も日本をフィールドとする都市祭礼研究だけでなく、アフリカをはじめとする異文化研究にも精力的であった。それらは都市をテーマとする点で一貫していた。本書の冒頭で、留学生としての目からみた「地縁のつながりによって伝統文化をしっかりと守る (p.15)」日本の祭礼といった、本質主義的であった著者の祭礼の捉え方が、フィールドを訪れるごとに変化していったという自省的な記述がある。本質主義的視点から脱したことに対して異論はない。都市祭礼をとりまく石岡という地域像がいかに創られていったのか、石岡ばやしがいかに石岡を代表する民俗芸能になっていったのか、といった構築主義的な分析も納得できる。そのうえで、日本とは異なる文化のなかで育った金氏だからこそその捉え方があるのではないか、と思うのは欲張りすぎだろうか。それこそが、金氏が石岡という場所において他者性を獲得していった一つの過程ではないだろうか。

このように考えるのは、評者自身も北部九州のある地方都市の都市祭礼を長年にわたって調査研究してきたが、自文化のなかでのフィールドワークであるがゆえに、相対化が難しいと感じることがあったからである。行き詰まり感のある近年の都市祭礼研究に新たな視点を持ち込むには、既存の理論的枠組みではなく、フィールドにおける自分自身をめぐる状況にどれだけ敏感になれるか、状況を生み出している過程をも相対化できるか、にかかっているように思う。これは祭礼研究にかぎらず、フィールドワークという営為すべてに言えることではあるが。

本書の冒頭に出てくる金氏の自省的な記述は、彼女自身の研究の転換点だとも言える。本書はその転換後の成果ということになるが、これ以降も調査者の経験知や属性によって、視点も見える内容も変わってきたのではないだろうか。フィールドワークを基盤とする学問は、自身が体感したことを学問的文脈にもってくるという、自らの足場から立ち上げていく強みをもっている。そうであるからこそ、異文化を背負う金氏の視座を、自身の身体を介した視座を—それは強みである—もっと前面に押し出してもよかったのではないかと思ってしまうのだ。著者の問題意識と、米山と中村の問題意識とを重ねて読んだ評者にとっては、著者の強みを活かしながら、今後どのような都市論を展開していくのか気になるところであり、大いに期待したい。注 (p.30) のなかでも触れているように、外国人の人類学者による日本の都市祭礼研究は少なく、しかも、その多くは英語で発表されている。日本語で 1 冊のモノグラフとして刊行された本書の意義は非常に大きいのだ。

事例の多様な読み

フィールドワークが他者と向き合う営為であることを考えると、異文化におけるフィールドで

あれ、自文化におけるフィールドであれ、インタビューの聞き手、あるいは調査者の属性が反映される。長期にわたるインテンシヴなフィールドワークは、相手を見る、と同時に、調査者自身も見られ、その見られ方にも地域社会の価値観が浮上してくるように思う。金氏は異文化からの調査者であると同時に女性である。ことに、日本で「伝統」と言われる行事には、女人禁制が伴うことが多かった。留学生であり女性であるという属性は、調査する側—調査される側双方にとって、調査過程における影響の有無はどうだったのだろうか。タブーが薄らいできたとしても、男性中心で行われる本土の祭礼を調査すること、その際の地元の反応を通して、地域社会の価値観や規範を把握できたかもしれない。

第5章の非年番町についての記述のなかに、「女の子に金棒曳きをやらせました (p.232)」とある。この金棒曳きになれるのは、年番町の10歳未満の女兒に限られるため、年番町に子どもを預けた人物の語りが記されている。そして、これが「女性にとっての一生に一度の貴重な思い出 (p.233)」とあることから、女性がこの祭礼の表舞台で関わるができるのはこの時だけであることが推測される。伝統行事における性差の問題は、ともすれば自明のこととされ、深い考察がなされないことが多い。本書の祭礼についてのインタビューの対象となっているのは大半が男性であるように思われる。

祭礼における性差の問題は世代的経験と絡んでくる。男女の二元論に収斂するのではなく、それを捉えるコンテクストが重要であること、世代や階層などさまざまな要素が絡み合い、期待されるふるまいや、そのふるまいに対する視線のありかたも異なることに目を向けたなら、取り上げられた事例はさらなる深い考察の対象となりえたのではないだろうか。

さらに、この事例をめぐっては、都市の中心と周縁という普段は目に見えにくい線引きが浮上してくる。小川道町が祭礼に参加していく過程は、経費の工面との折り合いの過程でもあるが、この過程に興味深い記述がある。多額の費用がかからないように、獅子頭や獅子小屋を作らず、「たる神輿」で参加したところ、子どもたちが「引け目を感じ」、結局は翌年から獅子を作ったこと、その子どもたちも中学生になると年番町の大人獅子についていく傾向にあるという事例は、他者をいかに意識し、自らのなかに取り込むかという動きを示している。

著者はこれを非年番町の小川道町側から担い手の流出として捉えているが、それを受け入れる年番町側に立てば、他町の子どもを受け入れる緩やかさを有していることになる。多額の費用をかけた側からするとたまったものではないのだが、視点を変えると、祭礼をはじめとする伝統行事の担い手をつなぎとめるのは他者の視線であり、それを自らが好しとする形で表現できる自由性なのではないだろうか。評者はかつて、都市祭礼における浮遊する若者の受け皿としてのボランティア・アソシエーションの機能について論じたことがあるが、本書で金氏が事例として示した若者たちの動きと重なった。金氏は特に深くは言及していないが、厚い記述であるがゆえに、提示された事例からこのような読みも可能になりそうだ。これもまた良質なモノグラフのもつ魅力だと言えるだろう。

4. おわりに

最後に、本書が刊行されたことで、金氏と石岡市のおまつり、そしてそこに関わる人びとの関係は新たな段階に入ることが予想される。それもまた研究対象となるであろうし、そこから金氏の都市社会をみる視座がどのように展開していくのか期待したい。

また、本書の書評という大役を仰せつかったことで、あらためて評者自身のフィールドとの関わりかたを振りかえる契機を与えていただいたことに感謝申し上げたい。

